

## 神奈川県植物研究史補遺 (2)

小 原 敬

### Takashi OBARA: Supplement to the History of Floristic Work in Kanagawa Prefecture, Japan (2)

○マリーズが訪ねた横浜山の手の植木屋アカサブロー  
(県植物誌 pp. 1357-1358.)

1877 (明治10) 年春, 来日したマリーズ (Charles  
MARIÉS 1850-1902) は, 横浜でアカサブローとい  
う栽培園を訪ねている。先年『神奈川県植物誌1988』  
に「神奈川県植物研究史I」を執筆したとき, このア  
カサブローがどのような人物であるか, 随分調べてみ  
たが遂に分らなかった。

このアカサブローという名前は日本人の人名として  
は馴染みが少ない。当時来日した外国人たちは地名,  
人名, 植物名などを耳から覚えて帰っている。この場  
合母音は相当変化していても, 子音は案外残っている  
ことが多い。それでこの場合カ行を考えるとアキサブ  
ローが最も妥当のような気がした。

昨1993年, 中尾眞弓さんの御好意で『横浜植木株式  
会社百年史』を会社から贈られた。早速ページを繰っ  
ていくと飯島秋三郎という名前が眼に飛び込んできて,  
体中を電気が走るような思いであった。

横浜が開港した後, 居留地の外国人の中で, わが国  
産植物種苗の商品価値を認めて, 貿易商品として最初  
に輸出に手を染めたのは C. クラマーであったとい  
う。

この英国人園芸家は1862 (文久2) 年来日し, 翌18  
63年居留地内にクラマー商会を設立して, 在留外国人  
向けに生花類を取り扱う傍ら, 僅かながら花木類の輸  
出を始めた。彼はジーボルトがオランダに持ち帰った  
ユリ類が開花し, 異常な高値で取り引きされたことを  
知っていた。彼は1868年に家庭の事情で帰国した。

1864 (元治元) 年, 英国陸海軍屯営所の軍人で園芸  
にも造詣が深かったジョン・ジョシュア・ジャーメン  
が来日し, 1867 (慶應3) 年に除隊してクラマー商会  
に入社し, ユリ根を故国に送った。ジャーメンは増徳

院境内の外人墓地に献花されていたユリの花を見てそ  
の美しさに打たれ, 輸出を決意したという。

1874 (明治7) 年にジャーメンの同郷のアイザック・  
バンティングが来日し, 後にユリ根の輸出を始めた。

一方, 明治初期に横浜で花卉類を取り扱っていた邦  
人の植木屋は南区中村町の地蔵坂から相沢に通ずる道  
路沿に営業していた。その主なものは飯島秋三郎, 鈴  
木新太郎, 鈴木音八, 脇金太郎, 須田定次郎, 牧野伊  
之助, 岩槻小三郎などであった。その頃の植木屋は造  
園師としての性格を強くもち, 単に植木の手入れだけ  
でなく, 作庭や簡単な建築も手がけていたという。

さて, 横浜におけるマリーズの行動は春山行夫氏の  
著書 (1980-p. 532) に詳しい。これは Garden に掲  
載されている彼の手記やブレットシュナイダーの著書  
(1898-pp. 741-744.) に依っているとされる。

「アカサブローという栽培園では鉢植えのラン類や,  
素焼きの植木鉢に植えたシュロ, カエデ, ソテツ, シ  
ダ, ゼラニウム, バラ, サボテン, マツなどが棚いっ  
ぱいに並んでおり, 別の棚には無限の変化をみせたツ  
ツジヤツバキが並んでいたが, それらはすべて鉢植え  
であった。ただし, この土地の主要な商売は, ユリを  
栽培して, その球根をイギリスに輸出することであ  
った。」

この記事で飯島秋三郎の当時の栽培園の様子を垣間  
見ることができる。

次に飯島秋三郎の経歴を述べる。

1846 (弘化3) 年, 埼玉県安行で生まれた。

1865 (慶應元) 年, 安行から横浜に移住。最古の植  
木屋の一人であった。

慶應年間 (1865-1868) 以来, 元町1丁目にあった

増徳院寺内で植木屋を営んでいた。

1868(明治元)年頃、須田定次郎と共に横浜植木行事の一人であった。

植木行事は植木屋を始めるとき鑑札を与えたり、植木の仕事を世話したり、外国人居留地への植木売り込みの認可などを業務としていた。

1889(明治22)年、パリ万国博覧会開催に協力し、フランス政府から、マンシオン・オノーブル(名誉状)を授与されている。

同年2月、わが国の園芸界の振起発達を図る目的で日本園芸会(会長花房義質、副会長田中芳男)が設立され、秋三郎は須田定次郎らと共に創立会員になった。

この会から海外に発送されていた『日本園芸会雑誌』を媒体として海外の種苗会社から同会宛に来た引き合いは総て飯島のところにまわされている。

1890(明治23)年2月7日、有限責任横浜植木商會が設立された。飯島は発起人の一人で取締役に就任した。会社設立の翌日、北米カリフォルニア州オークランド市に桑港支店長として赴任している。

翌1891(明治24)年6月1日、株式会社横浜植木商會が設立され、取締役として引き続き桑港支店長の職にとどまった。

1895(明治28)年8月10日、本社における臨時総会で桑港支店の閉鎖が決定された。

1910(明治43)年11月23日、初代社長鈴木卯兵衛病没。

1911(明治44)年2月16日、定時総会で二男浜吉第二代社長に就任決定。飯島秋三郎は取締役に再選された。

1915(大正4)年10月23日、秋三郎、逝去。享年79才。

マリーズが横浜に来たのは1877年春で、山の手に向かい歩いたと書いている。飯島が増徳院で植木屋を営み、横浜植木行事をしていた頃で両者の接点は濃いものがある。マリーズの言うアカサブローは飯島の店と考えて間違いないと考える。飯島はオークランド支店長として赴任しているが、ここは著者の出生地なので何やら因縁めいてくる。

最後に中尾眞弓さん、講談社、横浜植木株式会社に謝意を捧げます。

## 引用文献

BRETSCHNEIDER, E., 1898. History of European botanical discoveries in China II., pp. 741-744 *Imperial Russian Academy of Sciences. St. Petersburg.*

春山行夫, 1980. 花の文化史, 花の歴史をつくった人々, p. 532. 講談社, 東京.

小原 敬, 1988. 神奈川県植物研究史 I, 神奈川県植物誌1988, pp. 1357-1358. 神奈川立博物館. 神奈川県植物誌調査会, 横浜.

横浜植木株式会社編, 1993. 横浜植木株式会社百年史, 17pls. 4+330 pp. 横浜植木株式会社, 横浜.

(藤沢市藤が岡 1-1-4-106)



飯島秋三郎（1846—1915）  
横浜植木株式会社百年史より